

『游泳童論』における技術指導に関する研究

城 後 豊*

(平成3年4月30日受理)

要 旨

わが国の水泳指導は、歴史的に泳法の技術を固辞し、記録向上のための技術を強制する傾向にある。したがって、多様に変化する水との対応や水中での安全指導が軽視され、水泳と生活が結びついていないのが現状である。

そこで、本小論では、今日までに提唱されてきた水泳の基礎的技術に着目し、その指導の在り方について史的に講究した。その中でもわが国の水泳指導の黎明期に発刊され、最も生活に密着した『游泳童論』と現在の技術指導との比較を試み若干の資料を得た。

KEY WORD

Teaching of swimming 水泳指導

Teaching of skills 技術指導

YUEIDOYU

游泳童論

Basic of skills

基礎技術

研 究 目 的

わが国の水泳指導⁽¹⁾⁽³⁾⁽⁶⁾⁽²⁰⁾⁽²⁵⁾⁽²⁶⁾⁽²⁷⁾⁽²⁹⁾は、古い形式を堅持した泳法中心の指導や記録を重視する指導に力点がおかれてきた。その結果、水泳の基本ともいえる水中での安全が軽視され、変化する水との対応が十分に身につけていないのが現状である。その傾向は例年の水難発生状況¹⁾に見ることができる。平成元年度の発生件数は2594件、死者行方不明者数1555人にもおよぶ、その中でも就学児童生徒の数は全体の26.7%に達している。また、海浜実習では海を前にして急に臆病になる学生が急増している。それらの学生は、しばらく海を眺めて泳ごうとせず、波打ち際で座り込んでしまう。近づき、尋ねてみると「大きな波が恐ろしく、水が動くから怖い」と答える。いわゆる静水状態のプールでは泳げるが、動水の海で泳ぐことができないのである。これらの現象は、今までの指導が「競泳先行型」の練習傾向が強く、動く水や変化する水に慣れ、親しむ体験の少なさを示している。換言すれば、「プール囲い込みによる管理指導」⁽⁵⁾が進み、「事故保全の技術」⁽¹⁷⁾⁽²¹⁾⁽²³⁾⁽²⁴⁾が身につけていないことになる。

そこで、本小論では、水泳の基本である「生命保持」の立場から、明治初期から現在までに提唱されてきた水泳指導の内容や方法に着目し、その事例を史的に講究し、技術指導の在り方について比較した。

その中でも、生活との結び付きが深い武田泰信⁽²⁾の『游泳童論』⁽⁹⁾の指導法について若干の分析を試みた。

* 生活・健康系教育講座

研 究 方 法

近代泳法の発展的史実やプール建設の経緯を調査した⁽⁴⁾⁽²⁾⁽³⁾⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾⁽¹⁸⁾。そして、表1. に示すように1872年（明治5年）の学制発布以降に出版されたわが国と諸外国の水泳技術指導に関する文献書籍について史資料的に検索した。

表1. 主な参考文献・書籍

著 者 名	年代	著 書 名	発 行 所
武田泰信	1878	練水要訣	石原光璋
武田泰信	1880	游泳童論	天野雅
関正次	1925	水泳法及水泳生理学	中文館書店
佐藤三郎	1929	改訂水泳	目黒書店
池田尚康	1929	水泳十講第三版	体育連盟出版部
高石勝男他	1934	水泳日本	改造社
斎藤巍洋	1937	日本水泳読本	三省堂
斎藤六衛	1937	最新水泳術	元洋社
文部省	1938	水泳指針第五版	山海堂出版部
加藤摩訶蛙	1942	オヨギ三昧	白馬書房
平野豊	1943	国防游泳教本	大日本教科書
文部省	1965	水泳指導の手引き	光風出版
梅田利兵衛	1968	水泳一泳ぎ方から競泳技術まで一	虹有社
宮畑彦監修	1978	学校水泳の指導第七版	文教書院
John L.Murray	1980	INFAQUATICS TEACHING KIDS TO SWIM	Leisure Press
ゲルハルト・レビン	1985	東独の子ども水泳教室	ベースボール・マガジン社
杉原潤之輔	1985	水泳	泰流社
DAVID WILKIE	1986	The Handbooks of SWIMMING	PELHAM BOOKS
文部省	1987	水泳指導の手引き四版	ぎょうせい
COLIN HARDY	1987	Handbook for the TEACHER OF SWIMMING	PELHAM BOOKS
日本水泳連盟編	1988	新訂水泳指導教本9版	大修館

その結果、児童期の指導書としても最も古く日本泳法の一派である河合流十代目武田泰信⁽⁵⁾⁽⁴⁾⁽⁷⁾⁽⁸⁾⁽¹¹⁾⁽²²⁾が、1880年（明治13年）に発刊した『游泳童論』の指導内容と方法について講究した。そして、現行の指導要領や游泳童論の技術指導と類似しているドイツのゲルハルト・レビ

ン (Gerhars Lewin) の「子どもの水泳教室 (SCHWIMMEM MIT KLEINEN LEUTEN, 1981. 福岡考純訳)」⁽⁶⁾とを比較検討し、游泳童論の13項目の指導目録の技術内容とその方法について検索した。

結果・考察

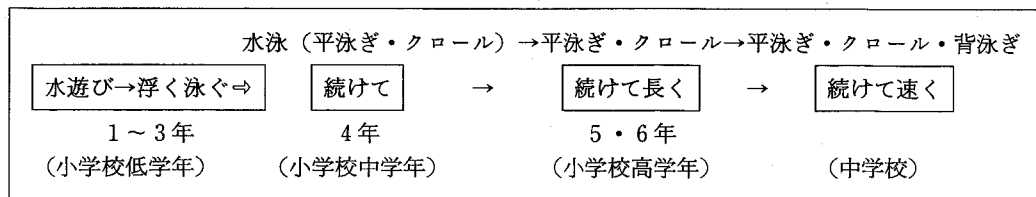
(1)技術指導の過程

游泳童論は“此書は子供の水遊びするに游泳のまなびを教諭さんが為に”の凡例に始まり、次の指導13項目の目録を示している。

<ul style="list-style-type: none"> 一 水術を學へき事 一 水術教諭の歌十八首 一 難船覺悟の事 一 浮物取勝早瀬升游の事并浮物取勝の圖并早瀬升游の圖 一 難水游の事 一 底物取勝底地砂取底泳出入の事并底物取勝の圖 一 底泳の事 一 仰向游の事 一 鴈行圓列遠游の事并鴈行の圖 一 平水游の事 一 浮游の事 一 游場定則の事 一 游場の事并男子游場水遊びの圖 	目 録
---	--------

表2. は、現行指導要領の技術内容を要約したものである⁽¹⁹⁾⁽²⁸⁾

表2. 現行指導要領の技術内容

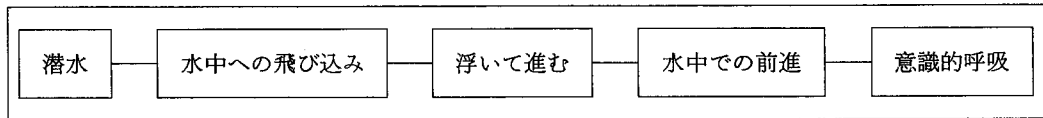


現行指導要領は、水慣れに始まり、泳法上の「速さ」や「長さ」を強調した泳法先行型のピラミッド型指導法にある。しかし、游泳童論では、「水の難」をまぬがれることにはじまり、水泳の「進等」を日常生活と関連づけた業が指導内容の中心となっている。その系統には、「物の種を蒔くときにその時節を過ぎすと実らざる」とし、児童期の発達特性を「筋骨強く、気も早く迫る、筋骨和柔く、身体も軽く、自然と水遊びを好む」を理由にあげ段階的にとらえている。

さらに、「学ぶべき事」として水泳の心得と水泳場の安全条件の選択について示唆している。そして、浮き身にはじまり静水や動水での泳ぎを身につけ安全への業を向上させる過程となっている。各水泳技術の段階では、水泳の特性を踏まえた事例的内容を示し、実際の指導を展開していくことを強調している。また、実際の生活に起こりうる水難事故での救急法の実際について救助器具を用いた実践について列挙している。いずれも様々な生活事象を踏まえた内容に注目できる。これらは、百年後（1981年）に出版されたレビンの指導内容と一致するものがある。

表3.は、レビンの指導概要をまとめたものである⁽¹²⁾。

表3. ゲルハルト・レビンの指導内容

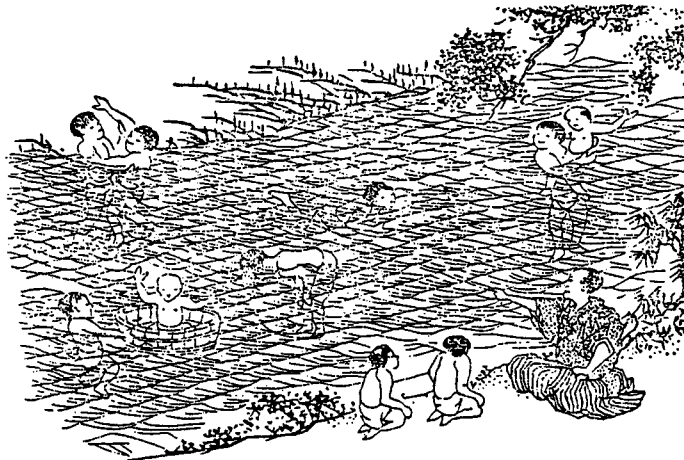


競泳指導では世界最高の水準といわれる東ドイツ（現在ドイツ）であるが、この指導過程を要約すると「児童の生命は守られ養われる」⁽¹³⁾水泳の基本から出発する発想が前提条件となっている。いわゆる児童期に基礎技術を訓練内容として重要視している。したがって、游泳童論の指導過程は、百年経た現在においても、その理念と内容には普遍性があった。

(2) 游泳童論における各技術指導の段階

① 游場と浮游体験

絵図1.は、「游場の事」「浮游の事」の場面である。



絵図1. 游泳場（武田泰信，游泳童論，1881）

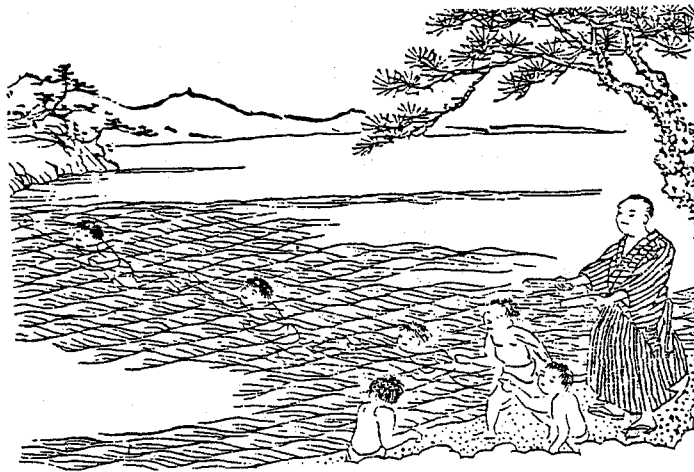
水泳の効果的な技術指導では、游泳場の選定が基本条件となる。游泳童論は「水底が砂地にて、水の深さ二尺余りの広き游泳場」を定めている。そして、そこでの游泳時期は「男女を問わず六才より十才までに水に入れること」が良いとしている。その初歩的段階では「浮游」を中心とした技術指導を促している。その方法は、長竿、せき板による増水（水深の増減）桐瓢、樽などの

浮遊物を活用し，“心より自然と水に慣れて浮く技術”を養うように勧めている。同様にレビンも5～6才から効果的なレッスンが必要であることを示唆している⁽¹⁴⁾。その過程は、練習場の条件を整え、変化に富んだ安全な場所を選択することとし、さらに、身体的および精神的な特徴を確認した上で指導にあたることを強調し、指導者の能力を問いただしている。

ところで、技術指導の第一歩は、浮き身の技術指導である。そのステップは「氣息8分、臍下へ含み立ち、腰をかかめ顔を耳まで伏しいれ、眼を開き水底を見る事から始める。手足の動作のともなった水面上での前後呼吸繰り返し、平ら浮きへと移行する。」としている。これは、初歩的段階での吸気呼気、水深、水中での開眼を段階的に進め、動作の伴った呼吸法と浮きに慣れて移動する方法の理に適っている。レビンの場合も「潜水」による水の浮力感覚と呼吸制御を体得させることを指摘している⁽¹⁴⁾。

②平水の体験

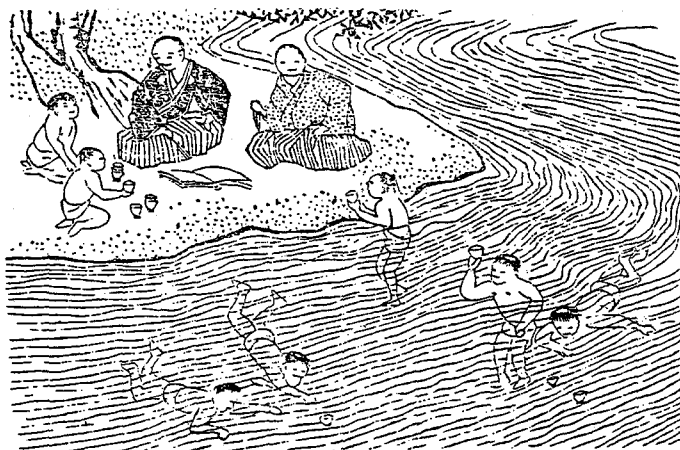
絵図2.は、浮き身につづき水中移行のための「平水游」の様子を表している。



絵図2. 雁行圓列遠 (武田泰信, 游泳童論, 1881)

「平水游」は、平水時で“水と和合て疲れざるを学ぶ”「手繰游」を中心とした「雁行游」つまり、「遠游」の位置づけにある。当時は、近代泳法のトラジオンやクロール泳法などは導入されておらず、いわゆる「バタあし」での移動でなく、横身での手繰り泳ぎが中心であった。そこでは、“手足の伸び縮みと一和し、心気安静”を目的とした「平水手繰游」といった泳法が主流であった。

絵図に見られるように、手繰りによる海や河などでの「雁行圓列遠游の事」として、そろって列を等しく、同じリズムで泳ぎ、現在の遠泳に似ている。しかも疲れを知らない“遠程のおよぎ”としての上達をねらいとしていた。また、游泳中の疲れを取るための「仰向け泳ぎ」を身に付けてさせることにより、足や手、からだなどを休め、氣息を整える浮き身泳ぎを位置づけている。その時の浮き方は、「鳥が羽をうつがごとく両手を左右に」といった、バックストロークの原形でもあるエレメンタリーバックストロークやオーバーアームバックストローク⁷⁾と類似した泳ぎで、身の安全を守る泳ぎとして重視されていた。が、しかし、当時のわが国では、背浮きは“どぎえもん泳ぎ”⁽¹¹⁾と言われ、余り歓迎されない傾向にあり、むしろ「休泳」として、休むための業に力点があった。



絵図3. 底物取勝底地砂地取底泳出入（武田泰信，游泳童論，1881）

③底泳体験と氣息

絵図3.は、「底泳の事」として、いわゆる潜水による浮き潜みの業である。

この様子は、茶碗等で水底の砂を取り、競争し、ゲームとして楽しみながら水泳技術を身につける方法である。その技は、立ち泳ぎを含み、「巻き波」などの渦中にまきこまれた時、水難防止としての役目を目的とした。呼吸法は、敏速かつ極速に水中に入出入りしながら行うことを求めている。いずれも、この潜水の技術は、初心者の水中における姿勢の安定を図る効果を持っている。このことは、レビンが主張している“呼吸の意識的制御や眼鏡反射機能の促進”と深く関係している⁽¹⁵⁾⁽¹⁶⁾。だが、現行の指導要領で潜水は死息の恐れがあることから明示されていない。しかし、水泳の基本となる呼吸動作の技術は潜りにおける呼気吸気の体験が必要であることは言うまでもない。

④難水での体験

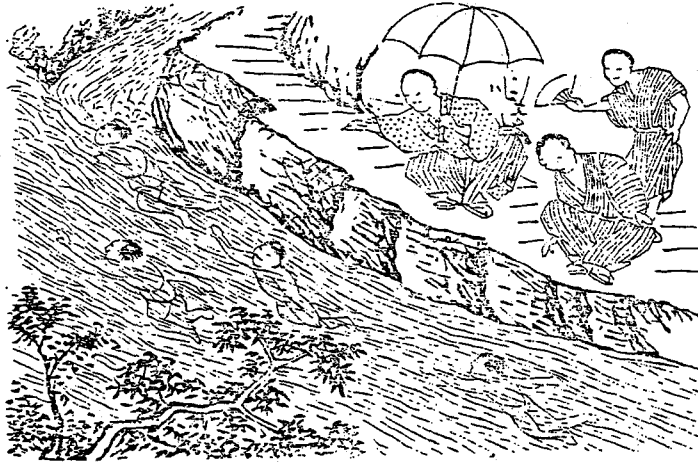
平水に臨んでは「手繰游」、激恐の難水に対しては、“氣勢敏速に働く「早抜き游」と号”、こ



絵図4. 難水游一（武田泰信，游泳童論，1881）

それを「難水游」とし、海河の状況に応じた泳法の習得をめざしている。絵図4.は、“いづれも両手交々に水をかき、水面上に鼻と目と手先の3点を真直し、体は斜めに、足は手に連て交々拍合わし、ふみのばし、弱き水の平水や強き水の難水”を判断して泳いでいる。

さらに、「浮物取勝早瀬升游の事」とし、水面上に茶盆杯（茶卓）を横に並べて浮かせ、一同に早抜き手で泳ぎ、それを取り合うゲームを行っている。また、絵図5.のように「早瀬升游」を行い、早瀬剣水の急流に向かって早抜き游で逆升起、熟達した業で難水を克服する泳ぎ方を身につけていくことを奨励している。



絵図5. 難水游一2 (武田泰信, 游泳童論, 1881)

いづれも、水中でどんな状況に置いても「安全で、確実に合目的な行動がとれる水泳術」を養う指導としている。

ま と め

本小論では、水泳指導の基本である「生命」との関わりから、今日までに提唱されてきた技術指導に着目し、史実的に講究した。そして、わが国最初の児童水泳書である『游泳童論』と現行の技術指導とを比較し、次の知見を得た。

『游泳童論』の指導論は、水泳は常に生活に始まり、あらゆる生活現象を想定し、安全に終着する水泳の業を目的としていた。その理念は、百年後の現在においても十分に活用できるものであり、その基底には「水を侮いる」ことなく「水を敬う」ための水泳技術の指導内容であった。さらに、浮く→泳ぐ→潜るといった段階の中で、どの様な水環境にも適応し、対応できる泳法を身につけていく指導方法が生きていた。これらは、生活の中の水泳術であった。

したがって、これからは自然の驚異を感得し、自然と共存した新しい技術指導の見直しが必要であり、様々な生活を見据えた環境の中で人間自立のための水泳を通底とした指導が不可欠であることを示唆するものであった。

注

1)水難発生状況は表4.が示すように多くの死者を出している。平成元年度の場合、そのほとんどが海(44.2%)河川(28.3%)用水路(13.8%)湖沼(7.9%)の自然水で起きている。プールでは全体の1.7%である。

表4. 水難の発生状況

年 次	S 60	S 61	S 62	S 63	H元
件 数	3182	2807	2581	2603	2594
死者行方不明者数	2004	1775	1614	1569	1555

(警察庁調べ, 1991年度)

2)武田泰信は、周防(山口県)の士族出身で日本泳法の河井流の師範であり、1869年(明治二年)三田尻に三箇所の水泳道場を開いている。同年に明治期では最初の水泳の専門書である『練水要訣』を出版している。水泳指導の黎明期における第一人者である。

3)游泳童論は、武田泰信が1880年に児童を対象とした初心者段階からの指導書として注目できる。その内容は①生活水泳としての所見が述べてある。②学制発令直後の組織指導としての一貫性がある。さらに、③指導の順序が明確である。いずれも生活術としての水泳指導が系統的で効果的ととらえた。

4)19世紀後半から20世紀前半にかけて遊泳場は、河川や湖などでロープを使い、簡単にしきったものであった。わが国における本格的なプール建設は、表5.の変遷を経て、表6.に見られるように当時の学校保有施設の約20%前後であったが、今日小中学校では80%以上の保有率に達している。このことがプール中心の組織指導や競泳を中心とした指導傾向に拍車をかけた。

表5. わが国におけるプール建設の変遷概要

年代	場 所
1907年	東京勧業博覧会会場(7.2m×14.5m)
1912年	大阪電気軌道株式会社(60坪)
1917年	東京 YMCA
1919年	大阪茨木中学校プール
1931年	明治神宮プール
1956年	日本最初の室内50m 別府温泉プール

表6. 昭和38年プール保有状況

	学校数	プール保有数
小学校	22443	4380
中学校	11068	1275
高 校	2841	519
合 計	36352	6174

(文部省調べ, 1963年度)

このようなプール建設ラッシュは、1964年の東京オリンピック以降であり、その時期の高度経済成長政策が環境を悪化させ、さらに、東京オリンピックの大敗にともない「国民皆泳」施策に基づく人工の水泳場建設に重きが置かれ、海や川といった自然水から児童生徒を遠ざけてしまう。その結果、厳しい監視のもとに「囲い込み」とか「組み込み」といわれる管理指導が徹底してくる。このことは、水泳指導の事情に変化が生まれ、生活の場から水泳が遊離していくことになる。

5)源流は、源頼朝の臣河井民部之介忠明を初代とする八幡流にあり、その裔河井半兵衛友明により小堀流として天正年間肥後の国主加藤清正の時代から水泳術を修練してきた流派に属する。そ

の後、寛政二年美濃部伝左衛門政雄が周防三田尻に移り25年間も伝授している。その後、御園生長左衛門を経て武田要平泰信（武田泰信）に受け継がれる。

6)福岡考純は“浮いて進むこと，潜ること，飛び込むこと，泳げること”すべてが満足できる教育的効果の期待できる指導書として紹介している。レビンは，バランスの取れた発達や健康増進から生活の教育のためにも有意義なスポーツとし“水中で確実に合目的な行動がとれる”技術指導を目指している。

7)日本の古式泳法には，休游や背伸と呼ばれる仰向け泳ぎがある。いずれも疲れをとるためのものであり，休息や人命救助がねらいであった。その動作は，足は蛙足またはあおり足で，腕は体側でかく（エレメンタリーバックストローク），または両腕を水上で同時にリカバーする（ダブルオーバーアームストローク）と似ている泳ぎであった。

引用参考文献

- (1)江橋慎四郎，水泳技術の系統と指導，体育科教育，第16巻第8号，1968，pp. 15-17.
- (2)FRANK G. MENKE, THE NEW Encyclopedia of Sports, A. S. BARNES & COMPANY, 1947, PP. 904-909.
- (3)林利八，新学習指導要領にみる水泳の位置づけ，体育科教育，第38号第6号，1990，pp. 10-11
- (4)池田尚康，水泳十講，体育連盟出版，1930，p. 52.
- (5)稲垣正浩，身体文化としての水泳～「プール」出現の意味するもの～，体育科教育，第38巻第6号，1990，pp. 10-11.
- (6)石川芳雄，日本水泳史，大阪高速印刷，1960，p. 8.
- (7)_____，p. 113.
- (8)_____，p. 393.
- (9)城後豊，泳ぐスポーツ，岩崎書店，1990，pp. 32-45.
- (10)_____，『泳ぎ』の史的記述に関する考察，上越教育大学研究記要，第10巻，第2号，1991，pp. 393-399.
- (11)加藤摩訶蛙，オヨギ三昧，白馬書房，1942，pp. 32-45.
- (12)レビン・ゲルハルト，福岡考純訳，東独の子ども水泳教室，ベースボール・マガジン社，1985，pp. 19-20.
- (13)_____，p. 25.
- (14)_____，p. 58.
- (15)_____，p. 59.
- (16)_____，pp. 65-66.
- (17)野村武男，水泳の授業を見直そう，体育教育，第33巻第6号，1985，p.20.
- (18)文部省，水泳プールの建設と管理の手引き，教育図書，1966，pp. 1-5.
- (19)文部省，水泳指導の手引き，ぎょうせい，1987，pp.5-12.
- (20)斎藤巍洋，日本水泳読本，三省堂，1937，p.11.
- (21)左近允正矩，臨海水泳にのぞむ指導者心得二〇題，体育科教育，第12巻第7号，1968，pp. 2-5.
- (22)斎藤六衛，最新水泳術，元洋社，1937，p. 8.
- (23)_____，pp. 154-159.
- (24)佐藤三郎，改訂水泳，目黒書店，1929，p. 169.

- (25) _____, pp. 180-181.
(26) 白山源三郎, 図説日本泳法-12流派の秘宝-, 日貿出版社, 1975, p. 28.
(27) 関正次, 水泳法及水泳生理学, 中文館書店, 1925, p. 12.
(28) 杉山重利他, 改訂小学校学習指導要領の展開体育編, 明治図書, 1989, pp. 184-199.
(29) 梅田利兵衛, 改訂小学校学習指導要領における水泳の位置づけ, 体育科教育, 第16巻第8巻, pp. 15-17.

A Study on Teaching of Swimming Skills in “YUEIDOYU”

Yutaka JOGO

ABSTRACT

Since old times, in Japan, swimming instructors have insisted on abiding by the basic swimming style, and have demanded that the technique of swimming fast. Thus, the instructors concentrated on teaching swimmers just how to swim quickly, and not to respond to the ever-changing ocean. The safety instructions sometimes have been ridiculed.

During my reseach, I delved into the historical swimming instructional methods proposed until how, referring to the fundamental theme of swimming instruction, “securing the life”. Especially comparing the present method to our first swimming instructional method designed for children “YUEIDOYU”.

The resurts got some material and consequently concluded the following;

- ① The basic method attached much importance to accustoming students to the water.
- ② The method observed the steps of floating, diving, and swimming.
- ③ The method aimed to make students adaptive to the water enviroment.